

## 梅沢本『古本説話集』にみる「繰り返し符号」の畳字語

萩原 義雄

## はじめに

梅沢彦太郎所蔵『古本説話集』は重要文化財に指定されている。この書は、院政期の重要な説話・言語資料として孤本であり、書写も鎌倉中期をくだらないという。国語史研究のうえで、説話集が重要な役割を有していることに、着目された橋本進吉博士を頂点とした門下の人々によって資料蒐集整備、索引の作成といった地道な研究活動が営まれて今日の研究成果となつている。こうした研究成果公開のなかで、梅沢本が世に出て田山方南の命名と知る。この内容調査として、山田忠雄先生があたつている。そして、川口久雄氏が岩波文庫から本文の翻刻を公刊し、影印も貴重古典籍刊行会から出版された。この書も入手が難しくなり、さらには、勉強社から再度、複製影印本が昭和五二年に川口久雄氏解題で刊行されている。

この本の説話関連資料としては、『今昔物語集』（鈴鹿本他、日本古典文学大系・岩波書店刊）、『打聞集』（山口光圓蔵、古典保存會複製）、『法華修法一百座聞書抄』（法隆寺蔵）、『宇治拾遺物語』（書陵部蔵写本）、『信貴山縁起絵巻』（日本絵巻物全集Ⅱ）等が知られている。また、言語資料として見るに、古辞書『類聚名義抄』（圖書寮本、観智院本）、『色葉字類抄』（前田本、黒川本、十卷本）、『節用集』（文明本、易林他）、『運歩色葉集』（元龜二年本・静嘉堂文庫本他二冊）、『日葡辞書』（一六〇四刊、岩波書店複製・邦訳本、岩波書店刊）等を参考にすることを奨める。

## 先行研究

先行研究として、山内洋一郎編『古本説話集総索引』（風間書房、昭和四四年刊）があり、翻字本文の後に索引編（一般語彙索引、助詞・助動詞索引、漢字索引）と付編（品詞別語彙表、品詞間比率表、用言語彙細表、品詞別使用度数分布表、用言語使用度数分布細表、動詞活用形比率表）が付されている。このため、この索引付きの本に限り、禁帯出のため利用は館内とされていて、やや不便を感じる。

## 本文の体裁

本文の体裁については、朝日新聞社刊、日本古典全書『古本説話集』に川口久雄氏が調査された結果を詳細に報告されているのでこれに譲る。ここで注目しておくこととして、漢字とかな文字の表記についてだけ、単簡に纏めておく。漢字では「尼」を「巨」、「果」を「果」、「京」を「京」、「蓑」を「蓑」と俗字使用が見られる。また、「佛」を「仏」、「歌」を「哥」、「候」を「一」と略体・草体を用いている。仮名遣いは、「も」を「ん」、「を」を「乎」と古体表記をする。この書写者については不明である。説話集として、本書は、平仮名和文物語系の表記資料ということ、他の漢字片仮名小書双表記の唱導説話系とは異なる資料といえる。こうしたなか、例えば『今昔物語集』の「月ノ光<sub>ニ</sub>被照<sub>テ</sub>□<sub>キ</sub>渡<sub>リ</sub>」<sup>「遣水ノ音□<sub>ニ</sub>」</sup>の欠字箇所を「祭<sub>キ</sub>」<sup>「閑<sub>ニ</sub>」</sup>といった具合に、本文欠落箇所が本書で確認できることも珍しくはない。

表1『古本説話集』品詞別語彙表

品詞		名詞	形容動詞	形容詞	動詞	副詞	連体詞	接続詞	感動詞	計
異なり語数	巻上	876	54	108 -135	503	85	10	7	5	1648 1677
	巻下	938	48	110 -125	737	134	11	12	8	1998 2013
	全	1535	83	156 -189	1001	157	13	12	9	2966 2999
延べ語数	巻上	2115	111	380	1669	301	85	29	10	4700
	巻下	3435	126	561	3109	662	256	71	15	8234
	全	5550	237	941	4778	963	341	100	25	12934

## 熟語の繰り返し符号「く」について

さて今般、書写本文の熟語「踊り字」に注目して考察してみよう。「繰り返し符号」として、「ひやゝかに」「かゝる」といった仮名文字一字に用いる表記の「ゝ」と疊字熟語に対して用いる「く」の二種類が用いられている。ここでは、後者の繰り返し符号について詳細に考察する。まず、

○たびたび【**度度**】ミかと乃○あまたをひくかへら勢給へと、「**卷上第一5才③**」

のように記載するが、字母表記はともかくも、「繰り返し符号」の符号「く」を日本古典全書では、「たびたび」と活字表記しているために原本表記の体裁が失われてしまっていることに気づかされる。このことが活字本で本書を読み進めて行くうえで、どういう問題を生み出しているかをこの授業を通じて知っておこう。

○らうらうし【**0**】おほ方いゆにらうくしくをハしましをるもかし「**上巻第一5ウ④**」※全書「**優**にらうらうじく」と表記。

○ひとびと【**人々**】まいは本院よかへら給てひとくく祿なやをはハまるび「**上巻第一5ウ⑧**」※全書「**人人**」と表記。

○ひとびと【**人人**】まゝくさゝまなりし人くもミれ老う勢もていぬらん「**上巻第一7ウ②**」※全書「**少く壯り**」「**人人**」と表記。

〈以下、字母表記は現代表記で記載する〉

この疊語「ひとびと」「人人」の書記方法だが、同じ書写者が「ひとく」と「人く」の両用表記を用いていること、さらに後者の漢字表記例だが、「人々」「人々」のような繰り返し符号符号を用いず、単漢字に対しても「く」の繰り返し符号符号で表記していることが知られる。この表記法は、

本書全体に見受けられることから、書記者が別でも原本通りに書写している書記姿勢を推測できるのはなからうか。また、大島本(傳飛鳥井雅康筆)『源氏物語』にも同様の表記が見えている。他に「中く」がある。

○ゝゝゝゝ【**聲聲**】むしのこゝさまくにきこゆ「**上巻第一8才⑦**」※全書「**聲聲さまさま**に」と表記。

○ひとびと【**人人**】人くのいふ様「**上巻第一9才③**」※全書「**人人のいふやう**」と表記。

○たまたま【**偶偶**】たまくまいれと「**上巻第一9才③**」※全書「**たまたままゐれど**」と表記。

○ひとびと【**人人**】ものかたりしつる人くも「**上巻第一10才⑥**」※全書「**物語しつる人人**」と表記。

○ひとびと【**人人**】かく人くまいりたれば「**上巻第一10才⑨**」※全書「**人人**」と表記。

○ひとびと【**人人**】この人くはかやうのわさすこしす「**上巻第二10ウ①**」※全書「**人人**」と表記。

○ひとびと【**人人**】この人くうたとももてまいりたりけるに「**上巻第二11ウ③**」※全書「**人人、歌ども**」と表記。

○たびたび【**度度**】をそきよしをたひくおほせられつかハす「**上巻第二11ウ⑤**」※全書「**いよいよ立ち居**」と表記。

○いよいよ【**弥弥**】いよくたちゐまたせたまふほとに「**上巻第二11ウ⑥**」※全書「**いよいよ立ち居**」と表記。

○はかばかし【**墓墓**】哥讀ともハかくしき(哥)ともゝえよみいでぬに「**上巻第二11ウ⑧**」※全書「**はかばかしき**」と表記。

○はかばかし【**墓墓**】さらにハかくしくつかまつらす「**上巻第二12才①**」※全書「**はかばかしく**」と表記。

○はかばかし【墓墓】なかにハカ／＼しからぬうたかゝれたらむ〔上巻第二12才④〕※全書「はかばかしから」と表記。

○さまざま【様様】さま／＼にのかれ申給へと〔上巻第二12ウ④〕※全書「さまざまに」と表記。

○ひとびと【人人】さるへき人／＼四五人許まうてゝ〔上巻第二13才⑧〕※全書「人人」と表記。

○ひとびと【人人】人／＼めてゝよみあひけれと〔上巻第三13ウ③〕※全書「人人賞めて」と表記。

○ひとびと【人人】人／＼うたよみけるに〔上巻第四15才⑥〕※全書「人人歌詠み」と表記。

○さはさはと【〇】たかちか心ちさハ／＼とやミにけり〔上巻第六17才⑤〕※全書「擧周、心地さはと」と表記。

○きらきら【〇】前裁のつゆきら／＼とをきたるに〔上巻第六17ウ⑥〕※全書「前裁の露、きらきらく」と表記。

○あはあはし【淡淡】あは／＼しき物におもはれまいらせたる〔上巻第六18ウ③〕※全書「あはあはしきものに」と表記。

○はるばる【遥遥】はる／＼と野中ニミゆるわすれミつ〔上巻第八20ウ②〕※全書「はるばると」と表記。

○たえまたえま【絶間絶間】たえま／＼をなけくころかな〔上巻第八20ウ③〕※全書「たえまたえまを歎く」と表記。\*三拍の和語名詞の疊字表記。

○きりぎりす【蟋蟀】あきの夕くれきり／＼すいたくなきけるを〔上巻第八20ウ⑥〕※全書「きりぎりすいたく鳴きけるを」と表記。\*五拍の和語名詞の疊字表記。

○つれづれ【徒然】つれ／＼にさふらふにさりぬへきものかたりや候と〔上巻第九22才⑦〕※全書「つれづれに：物語やさぶらふ」と表記。

○いよいよ【弥弥】いよ／＼心はせずくれてめてたきものにてさふらふほとに〔上巻第九22ウ③〕※全書「いよいよ心ばせずぐれて」と表記。

○をそしをそし【遅遅】とのをそし／＼とおほせらるゝ御こゑニ〔上巻第九22ウ⑩〕※全書「遅し遅し」と仰せらるる御聲に」と表記。\*三拍の和語形容詞「おそ・し」を疊字表記。

○ほどほど【程程】とりつぎつるほど／＼もなかりつるにいつのまにおもひつゝけむ〔上巻第九23才④〕※全書「ほどほどもなかりつるに」と表記。\*山内氏の注記に「或いは「／＼」は衍か。刊本世

繼「取つきつる程、殿の仰せられつる程もなかりつるに」と記載する。

○ひとびと【人人】まことに子孫さかへて六条の大貳ほりかハの大貳など申しける人／＼この伊勢大輔のまこなりけり〔上巻第九23ウ④〕※全書「榮えて：堀河大貳：人人」と表記。

○ますます【増益】くもりなきかゝみのひかります／＼も〔上巻第九24才①〕※全書「曇りなきかみ

みの光ますますも」と表記。山内の注記に「今鏡三句「ます／＼」に作る」と記載する。

○をそしをそし【遅遅】をそし／＼とせめにつかハす〔上巻第一四26才⑩〕※全書「遅し遅し。」と責めにつかはす」と表記。

○う／＼う／＼【呬呬】う／＼／＼とうめきけれとえせさりけり〔上巻第一八28才⑦〕※全書「う／＼、う／＼」とうめきけれど」と表記。\*山内の注記に「宇治「うら／＼」は「う／＼」の誤写か。この

「ら」は「う」にも近く、「う／＼／＼」と読む人もある。」と記載する。

○いといと【絲絲】いと／＼あさましく心うくて○そらなきの涙ちやうしくゝむ事とゝめてけるとそ〔上巻第一九30才②〕※全書「いといとあさましく心憂くて、そののち虚泣きの涙」と表記。

○つれづれ【徒然】つれ／＼二おほゆればちやうもむにまいり○けるに〔上巻第二〇30才⑩〕※全書「つれづれにおぼゆれば、聴聞にまゐりたりけるに」と表記。

○ときどき【時時】いふかひなき事なれはとき／＼うちおとつれてすきけり〔上巻第二〇31才⑥〕※全書「時時うちおとづれて、過ぎけり」と表記。

○さまざま【様様】さま／＼ものともをたてまつるなかに〔上巻第二一33才③〕※全書「さまざま物どもを」と表記。

○はしばしら【橋柱】くちこけるなからのハしく／＼のりのためにもわたしつる哉〔上巻第二一33才⑤〕※全書「朽ちにける長柄の橋柱 法のためにも渡しつるかな」と表記。\*五拍の複合和語名詞の疊字表記。

○すきずき・し【好好】すき／＼しくあはれなることゝも也〔上巻第二二33ウ④〕※全書「すきずきしく、あはれなることどもなり。」と表記。\*五拍の複合和語形容詞の疊字表記。

○ぬれぬれ【濡濡】ぬれ／＼もなをかりゆかむハしたかの うはけのゆきをうちからひつゝ〔上巻第二六35ウ⑨〕※全書「濡れぬれもなほ狩りゆかむはしたかの うは毛の雪をうち拂ひつゝ」と表記。

○をのをの【各各】をの／＼我かまさりたりとろむしつゝ、四条大納言のもとへふたりまいりて〔上巻第二六36才①〕※全書「おのおの「我がまさりたり」と論じつゝ…二人まゐりて」と表記。

○さきざき【先先】さき／＼なに事もなかつたふらうへてをうちけるにこのたひハほいなりけりとそ〔上巻第二六36才⑧〕※全書「さきざき何事も、長能は上手を打ちけるに、このたひは本意なかりけるとぞ」と表記。

○すきずき・し【好好】あはれにすき／＼しかりける事ともかな〔上巻第二六36才⑧〕※全書「あはれにすきずきしかりける事どもかな」と表記。

○さまざま【様様】さま／＼をかしきことをつくしてすみ給ける〔上巻第二七37才⑩〕※全書「さまざまをかしきことを盡して、住みたまひける」と表記。

○たびたび【度度】たいこ御かとハ御こにておハしましたしければたひ／＼行幸ありけり〔上巻第二七37ウ③〕※全書「醍醐の天皇は皇子におはしましたしければ、たびたび行幸ありけり」と表記。

○いよいよ【弥弥】そのゝちいよ／＼あれまさりて松の木もひとゝせの風にたふれにしかハあはれにこそ〔上巻第二八39ウ③〕※全書「そののち、いよいよ荒れまさりて…風に倒れにしかば、あはれにこそ」と表記。

○やうやう【漸漸】このめのとひとにいひほらされてはかもなくやう／＼しうないつ〔上巻第二八41ウ①〕※全書「この乳母、人にいひほらされて、はかもなく、やうやうし失ひつ」と表記。本文は「うないつ」で「し」の字を欠く。

○たびたび【度度】めのとかくてふみたひ／＼とりつたふれとひめきミゝもいれ給はず〔上巻第二八42才②〕※全書「乳母、かくて文たびたび取り傳ふれど、姫君見も入れたまはず」と表記。

○たびたび【度度】文たひ／＼になりぬればその日とさためてこさせつ〔上巻第二八42才⑥〕※全書「文たびたびになりぬれば、その日と定めて來させつ」と表記。

○なくなく【泣泣】その日になりていみじきことゝもちきりおきてなく／＼わかれてみちのくこへいぬ〔上巻第二八43才①〕※全書「その日になりて、いみじきことども契りおきて、泣く泣く別れて、陸奥國へ往ぬ」と表記。

○ひとびと【人人】それかむこにせむとて人／＼をこせてむかへければをやいとかしこきことなりとよろこひてやりつ〔上巻第二八43才⑦〕※全書「それが「壻にせむ。」とて、人人おこせて迎へければ、とかしこきことなり」と喜びて、やりつ」と表記。

○たびたび【度度】たひ／＼たしたて、せうそをやれと〔上巻第二八43ウ④〕※全書「たびたびたして」とし、頭注に「出だしたてて」か」と記載。

○こほれこほれ【溢溢】ついちこほれくもありしにおほうハこいゑゐにけり〔上巻第二八44才⑤〕  
※全書「築地こぼれこぼれもありしに、おほうは小家居にけり」と表記。\*山内の注記に圖本名義「壊  
コホツ(平平上)」「觀本名義「毀……コホツ(平平上)など、「こほつ」「こほる」は清音であつた。」と  
記載。○ゆがむゆがむ【歪歪】まむところやのありしいたやなんゆかむくのこりたる〔上巻第二八  
44才⑨〕※全書「政所屋のありし板屋なん、ゆがむゆがむ残りたる」と表記。

○どころどころ【處處】おほかりしきもこところきりうしなひたり〔上巻第二八44才⑨〕※全書  
「多かりし木も、ところどころ伐り失ひたり」と表記。

○はかばか・し【墓墓】あまハかくしくもいはず〔上巻第二八45才②〕※全書「尼、はかばかしく  
もいはず」と表記。

○しかじか【然然】我ハしかくの人にあらずや〔上巻第二八45才⑦〕※全書「我はしかしかの人に  
あらずや」と表記。

○ひとびと【人人】くにくたらせ給しひとせハかりハ候し人くも御せうそくやあるとまちき  
こえさせしに〔上巻第二八45ウ⑥〕※全書「人人」と表記。

○ひとびと【人人】おすれハてさせ給たるなめりとさふらひし人くも思ひて候しかとも〔上巻第二  
八45ウ⑨〕※全書「人人」と表記。

○ちりぢり【散散】ミなちりくにまかりうせ候てしむてんハとのうちの下人のたき物にてこほち  
候しかハたふれ候にき〔上巻第二八46才②〕※全書「皆ちりぢりに…寢殿は殿の内の下人の焚き物に  
てこほちさぶらひしかつば、倒れさぶらひにき」と表記。

★以下、時間の関係上、主なる語を選らんで掲載しておくので、全文の  
状況は未掲載にしておく。時間のある人は調査されたい。

○くやくやく【くやくく】とまつゆふくれといまはとて かへるあしたといつれまされり〔上巻第三  
五1才⑨〕

○はるはる【〇】めぐりくるハるくことにさくらはな いくたひちりきひとにトハヤ〔上巻第三  
九53才③〕

○きらきら【〇】雲ほう四五丈ハかりはれて七星きらくみえ給〔下巻第四七64才④〕  
○なかなか【中中】中くその後かしらのけふとりておそろしきことかきりな〇〔下巻第五一70ウ  
⑦〕

○かならずかならず【必必】としころよミたてまつる仁王經をかならずくけんあらせ給へとねんし  
てちうもんのおきのうちにつとめてより候て〔下巻第五二73ウ⑦〕

○うつぶしうつぶし【打伏打伏】觀音たすけさせ給へとてはつせにまいりておまへニうつぶしく  
申しけるやう〔下巻第五八89才⑩〕

○うつぶしうつぶし【打伏打伏】うつふしくたりけるを〔下巻第五八89ウ④〕  
○うつぶしうつぶし【打伏打伏】かくてうつふしくたれハ寺のためけからひいてきて大事なりなん  
〔下巻第五八89ウ④〕

○かはるがはる【代代】かはるく物をくはせけれハもてきたる物をくひつゝ〔下巻第五八90才⑦〕

○ほとほと・し【殆殆】ほと／＼しきやうにミゆれハマことにさハきまとひて〔下巻第五八92ウ⑨〕  
○くふくふ【食食】物をくふ／＼ありつるからしをなに／＼ならんすらむ〔下巻第五八95才③〕

○いつしかいつしか【何時しか何時しか】いなみのにその日になりていつしか／＼としありくにえもいはぬ女房のいろ／＼のきぬきてすそとりいてきたり〔下巻第六二107ウ⑦〕

○いろいろ【色々】いなみのにその日になりていつしか／＼としありくにえもいはぬ女房のいろ／＼のきぬきてすそとりいてきたり〔下巻第六二107ウ⑧〕○いかにもいかにも【如何にも如何にも】いかにも／＼すへきかたなし〔下巻第六四113ウ⑩〕

○そよそよ【〇】たにのおくのかたより物のそよ／＼とくる心ちのすれハなに／＼かあらんと思ひてやをらミれハえもいすおほきなるしやなりけり〔下巻第六四114才⑥〕

○かつかつ【〇】すくしたれハかつ／＼とかけのやうにてやう／＼家にいきつきぬれハめこともすさともなとミてあさましかりなきさはく〔下巻第六四115才⑧〕

○ゆきゆき【〇】このくらす／＼にゆき／＼とゆるく〔下巻第六五117ウ②〕

○まことまこと【信信】まこと／＼ありつるハちをわすれてとりいてすなりぬれ〔下巻第六五117ウ④〕

○さはさは【〇】御心ちさは／＼となりていさ／＼か心くるしきこともなくてれいさまにならせ給にければ人／＼よろこひしりをもたうとかりめてあひたり〔下巻第六五120ウ⑥〕

○やれやれ【破破】ふくたいをのミきておこなひけれハはてにハやれ／＼となしてありけり〔下巻第六五123才①〕

○のべのべ【延延】又七日のへてまいりけれとなをみえねハ七日をのへ／＼して百日まいりけり〔下巻第六五123ウ⑧〕

○ゆめみんなゆめみんな【夢見夢見】又かもにまいりて七日はかりと思とれいのゆめみんな／＼とまいりありけるほとに百日といふよのゆめに〔下巻第六六124才④〕

○きびきび【〇】へちにいときら／＼しからねといとたのしきほうしにてそ有ける〔下巻第六七125才⑥〕

○とくとく【疾疾】つとめてハマたとく／＼おはせそこ／＼也〔下巻第六七125ウ⑩〕

○そこそこ【〇】つとめてハマたとく／＼おはせそこ／＼也〔下巻第六七125ウ⑩〕

○いづちもいづちも【何処何処】いひせためられんかわひしきま／＼いつちも／＼まかりやしなましと思ひ候へとも〔下巻第六七126ウ⑦〕

○うつふしうつふし【俯俯】ほとけの御前にひたひにてをあて／＼うつふし／＼たり〔下巻第六七128才⑨〕

○きやうきやう【輕輕】くるまよりをりてあゆまむきやう／＼におほしけれハこのてらにくるまにのりなからいり給をつミえかましくやおほしけむなわをひき／＼りてやまさまへにけていぬ〔下巻第七〇134ウ②〕

○ふしてはをきふしてはをき【臥起臥起】くるしかりてふしてハをき／＼しつ／＼あせになりてたしかにミめくりしてうしやにかへりてきたまくらにふしてよつのあしをさしのへてねいるかことくしてしぬ

〔下巻第七〇135ウ⑧〕

○なぬかなぬか【七日七日】その／＼ちなぬか／＼の經仏卅九日又のとしのはてにいたるまでよろつひととり／＼にをこなふ〔下巻第七〇136才④〕

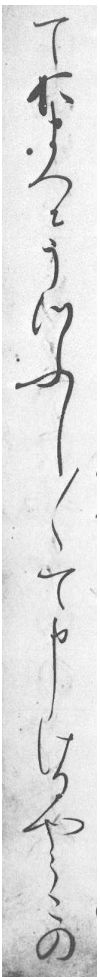
○とりどり【取取】その／＼ちなぬか／＼の經仏卅九日又のとしのはてにいたるまでよろつひひとり／＼にをこなふ〔下巻第七〇136才⑤〕

○釋迦仏かへすくとき給ことなれハ仏のミのりをしんせん人ハうたかふへきにもあらず〔下巻第七〇137才①〕

○はかばか・し【墓墓】やうくつくるにさい木などもはかくしくもいてこそ佛の御はくもをしはてられ給はぬにこのうしほとけををかミたてまつるとよろつの物をくしつこの御てらにたてまつる物をとりあつめてたうならひに大もん又あまりたる物をハ僧房をつくりてそのうちにも又物のあまりたれハくやうをまうけて大多をえをこなひつ〔下巻第七〇137ウ①〕

この繰り返し符号をどう読むか

1〇て、おまへニうつふしくて申しけるやう、この〔下巻第五八89才⑩〕

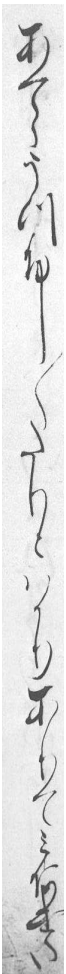


2〇ハマかりいつましとてうつふしくたりけるを…〔下巻第五八89ウ④〕

…かくてうつふしくたれハ、寺の…〔下巻第五八89ウ④〕



3〇ほとけの御前にひたひにてをあてうつふしくたり〔下巻第六七128才⑨〕



4〇ふしてハをきくしつゝ〔下巻135ウ⑧〕

この四例は、「うつぶし【俯】」の畳字表記を四拍すべてに還って読むのか、または、「うつぶしふして」と二拍だけ還って読むのがよいのか解釈のうえで分かれることはいうまでもなからう。さらに、全書本文では、「臥しては起き、臥しては起き」といった、係助詞「は」を介在した用例を拾うことが出来る。これを「臥しては起き起きしつゝ」とは、校訂者は一人として読まないことも茲に添えておきたい。

こうした漢字ひらがな文の繰り返し符号「く」の符号には、三拍已上のことばを繰り返して読むうえでの何等かの法則が存在するのか、否かをこの文脈から見極めておくことも古典文学を解釈するために必要不可欠なことは分明の事実である。この古典資料の解釈学のうえで最も大切なのは、原書写の文章表現から読み解くことにある。原書写資料を用いないで活字に依存した解釈研究の作業からでは、単一化された内容ばかりであって、いわば見過ごしたものが必ずあって、その一つ一つの保有する特徴や特質のある表現そのものを見逃し、真の古典解釈を味わえないことに繋がりがかねない。こうした文献直視の姿勢面から新たな古典資料分析方法として、目覚ましき進捗を成し得ることを若い方々に期待したい。



参考資料(閲覧結果)

大島本『源氏物語』の「人なミく」



大島本『源氏物語』松風之卷の「へたてく」〔二才⑨〕



大島本『源氏物語』橋姫之卷の「おとろ／おとろしき」〔三七ウ③④〕



※『古本説話集』と、『源氏物語』の「おとろおとろしき」を比較してみると、『古本説話集』の「人く／や、「ますく」は改行はなくすべて一行の中に書かれているのに対して、「おとろおとろしき」は「おとろ」で改行され、次の行に「おとろ」と書いてあるので一行では書ききれずに改行するときは、繰り返し符号の符号「く」は使わずに、書くのではないのかと考えました。

『源氏物語』の「おとろおとろしき」の例は、まだ、一例しか見つけていないので、この規範概念は定め難いので、更に用例を探すことで確乎たる規範性として位置づけることになるかもしれません。『古本説話集』と『源氏物語』とは、いずれも鎌倉中期に転写されたものであり、時代の共通性があります。書き手が違うので「繰り返し符号」の書き方にも共通の書記規範があったのかどうかも気になります。〔二〇〇六年度学生コメントより引用〕